

転生王子は不憫な推しを

過保護に甘やかす

グレン卿

リヒトの専属護衛騎士。
公爵家の人間だが、
訳あって王宮近衛騎士団に
所属している。

フリーリン

リヒトの乳母であり、
ヴィント侯爵家の当主。
リヒトの母である王妃の
親友で、王妃とリヒトに
一身を捧げている。

ナタリア

大国ルシエンテ帝国の姫。
乙女ゲームのヒロインであり、
ゲームではリヒトの
婚約者だった。

オーロ皇帝

ルシエンテ帝国の
皇帝であり、
ナタリアの祖父。
エトワール王国のとある
『悪習』を嫌っている。

魔塔主

魔法研究所、
通称『魔塔』の所長。
實力は折り紙付きだが
魔法にしか興味が無い。

カルロ

伯爵家の長男であり、
乙女ゲームの攻略対象。
ゲームでは悲惨な出自ゆえに
人間不信だった。
リヒトが不憫な環境から
救った結果、彼に心酔の域で
懐き始める。

リヒト

エトワール王国の第一王子。
日本で同性愛者のオタクとして
生きていた記憶があり、
この世界が舞台の乙女ゲームで
遊んでいたため、知識面がチート。
ゲームで報われない半生だった
推し・カルロを絶対に幸せにしたい。

唐突だが、私は前世でゲイだった。私が若かった頃はそれを公に言えるような風潮ではなく、私は恋愛対象が同性であることを隠しながら長年生きてきた。徐々に男性同士の恋愛を題材にしたBL漫画というものを本屋で見かけるようになり、そのうちテレビではBLドラマも見られるようになり、人気動画サイトでは同性愛者のカップルが配信するようになっていたりした。

しかし、時代が変わっても差別が完全になくなるわけではないし、逆に気を遣われたり、冷やかされたりするのも嫌だった。だから、私はただ女性との縁がないフリをして、異性愛者が溢れる社会の中で擬態しながら、密やかに生きてきたのだ。

自分の恋愛対象が同性であることは隠していたが、SNSで密かにBL漫画の感想を投稿していた私には顔も知らない腐女子や腐男子の仲間がいた。ある時、彼女ら彼らが揃ってハマったのが『星鏡のレイラ』という乙女ゲームだった。魔法学園の中のどこかにいるとされるレイラという神兽を探しながらヒロインが攻略対象の少年達と仲良くなっていくという恋愛シミュレーションゲームだ。

一見、至って普通の乙女ゲームであるこのゲームがなぜ腐女子や腐男子に人気なのかというと、攻略対象の一人、人間不信を拗らせた根暗キャラであるカルロ・ルーヴのバッドエンドが同性愛者のカルロの叔父による監禁陵辱エンドだからである。腐女子、腐男子の仲間達からこの結末を知ら

されないままにアドバース通りにプレイした私はあまりのショックでひと月ほどSNSを開けなかった。

私は潔癖なまでに陵辱ものがダメだった。しかも、いい大人が若者や子供に対して無理矢理な発言語道断だ。絶対にやつていい行為ではない。たとえそれが架空の世界の作り物の話でも、私は受け入れられなかった。しばし夢でもうなされるほどの状態だった私はひと月後にSNSに復帰して、仲間達に正直にこうした作品が無理なのだ打ち明けた。仲間達は理解してくれて、今後はそうした作品の場合には前もって私に教えてくれると約束してくれた。

出会いこそあまり良いものではなかったが、その後も私は『星鏡のレイラ』を何度もプレイした。どうしても、カルロのハッピーエンドが見たかったからだ。腐女子、腐男子の仲間達はヒロインとカルロが結ばれるハッピーエンドになるようにプレイしたことはないというので、あまりアドバースはもらえなかったから何度も他の攻略対象とのハッピーエンドになったりした。

人間不信のカルロの攻略はかなり難しかったが、何度失敗しても私は諦めず、カルロを幸せにするために残業もそこそこに、飲み会も断つて、少しでも早く家に帰ってゲームをした。何度もプレイしているうちに私はすっかり『星鏡のレイラ』にハマり、不憫なカルロが推しキャラになっていた。

SNSの仲間達はカルロが他の攻略対象と幸せになる二次創作も勧めてくれたけれど、私はそれも断った。カルロにとつて初恋の相手はヒロインなのだから——人間不信ゆえに攻略こそ大変だったが、カルロがナタリアに惹かれているのは一目瞭然だった——やはりちゃんと好きな人と幸せにしてあげるべきだと思った。

しかし、結論から言うと、私はカルロを幸せにしてあげることができなかった。私が死んでしまったから。

どこでどうして死んだのか、死んだ時の記憶は思い出せない。ただ、気づいた時には自分はやけに豪華な部屋にいる赤ん坊だった。

最初は天井しか見えない状態に何が何やらわからず、どこかで倒れて病院に運ばれ、ベッドに横になっていいのかと思っただ。しかし、冷静に自分の状態を確認すると、舌をうまく動かせなくて話すことはできず、同じく手足もうまく動かすことができないことに気づいた。それでも重篤な事故で体が動かさなくなったのかと考えたりもした。

自分が赤ん坊だと気づいた最大の理由は、他の人間が軽々と私の体を抱き上げたことだ。しかも、女性がだ。女性が抱き上げてくれて私の視線の高さが変わり、そこでようやく自分の体の変化を受け入れるしかなくなったのだ。

そして、ここが前世の世界とは違うこともわかった。なぜなら、部屋や家具が前世で旅行に行つた西洋のお城の中にそっくりだったし、世話をしてくれる女性達の顔が東洋人ではないし、彼女達の服装が西洋風の豪華なドレスだったからだ。そのうえで、英語どころか知る限りの外国語——挨拶程度なら数か国語知っていた——が一切聞こえてこないことから、近世の西洋にタイムスリップしたわけでもなさそうだな、とあたりをつけたのである。

おそらく母親と乳母であろうと思われる者達以外の女性の服装はメイド服だったが、日本のメイド喫茶の店員さんとは違う、品性漂うクラシックなものだった。ここが日本でもなければ二十一世紀でもないのは明らかだった。

あまりにもリアルで長すぎる夢を見ているのか、もしくは、異世界転生をしてしまったのだろうという事は、前世で嗜んだアニメや漫画の知識で容易に認識できた。認識はできたが、理解して受け入れるのにはしばしの時間がかかった。

何せ私の意識はとっくに成人した男性だ。傍目には赤子だと分かっているけど、生きるための全てのことに世話を焼かれるのは恥ずかしい。だから、他の赤子より努力して、立つのも、歩くのも、喋るのも早くなった。羞恥心が私の成長を早めたのだ。

そうして動けるようになった私は母親や乳母に本をねだった。彼女達が持ってきてくれた絵本で文字と言葉の勉強をするため、母親や乳母の仕事の邪魔にならないようにタイミングを見計らって絵本を読み聞かせてもらった。

彼女達がいなくても一人で本を眺めて勉強を進めた。読めない文字が出てきた時には近くにいてるメイドに文字を指差して読んでもらって覚えた。当時の私はまだ舌がうまく動かせず喋ることはできなかったから、誰も私が本当に文字を読んでいるとは思っていなかっただろう。

前世の記憶がある分、文字と音や意味を関連づけて理解するのは難しくなかった。さらに、赤ん坊の記憶力は素晴らしく、一歳になる頃にはさまざまな単語を理解して読むことができていた。

毎日毎日飽きもせずに数冊の絵本を繰り返し眺めていた私を、そんなに本が好きならばと母親が

図書室に連れていってくれたある日、母親の腕に抱かれて図書室内を移動していた私はちょうど目の高さのところにあつた本に手を伸ばした。母親は、これはまだ早いと笑ったが、私はその本を小さな両手でなんとか取り出し、その表紙の文字を読んだ。

「まほーちよ」

『魔法書』、たったそれだけの単語だ。しかし、母親もその後をついて来ていた乳母やメイドも驚愕の表情を見せて、その場は大騒ぎになった。なぜなら、それが、私が初めて発した言葉だったからだ。

私には赤ん坊がいつから喋り出し、最初にどのような単語を言うべきなのかわからなかった。わかっていたら、寝ずの番のメイドが居眠りしている間に立つ練習や歩く練習をしているように、こつそりと喋る練習をしておいて、適切なタイミングで披露しただろう。だが、それらの知識がなかった上に、自分の舌がそれなりに発達してきていたことを知らなかった。そのため、興味のある本に書かれていた文字をうっかりそのまま読んでしまったのだ。

初めて発した言葉が『魔法書』であり、さらに一歳にして文字を読んできたために、私は両親や乳母、メイド達に神童扱いされることになった。しかし、幸いなことに、両親は私が七歳になるまでは私の存在を隠して育てると決めていたため、親バカな両親が大勢の人の前で大っぴらに息子自慢をすることはなかった。

ちなみに、私はどうやらこの国の第一王子という厄介な立場にあるようだった。乳母は私を「リヒト様」と様付けで呼び、メイド達は「リヒト王子」と呼んでくる。両親はごく普通の両親のよう

に「リヒト」と呼ぶが、その頭には時々王冠やティアラがあった。毎回つけているわけではないので、おそらく、公務の前後に私の元へ寄った際についているのだろうと推測している。

王と王妃という立場の両親にとっては、息子が神童というのはとても喜ばしいことのように、これまで以上に様々な本を与えてくれるようになったことはありがたかった。ただ、帝王学の書物はさすがにまだ早いというか、あまり興味がないので放置している。

私は両親や乳母が揃えてくれた本の中から魔法に関するものを選んで読み漁った。当然、まだわからない文字も多かったが、気配りのできる乳母が辞書も用意してくれていた。メイドが私の質問に答えられるようにと用意された辞書のようなだったが、私はこれを大いに活用させてもらった。そして、この世界に生まれ落ちてからずっと学びたかった魔法について学習を進めていった。

乳母達の話から、この国がエトワールという国だということにはわかっていった。そして、王子である私の名前はリヒト。『星鏡のレイラ』の舞台、そして攻略対象の一人の名前と合致する。

そのことから、私はここが『星鏡のレイラ』の世界だろうとあたりをつけていた。そして、あの日図書室で手に取った魔法書で見慣れた魔法陣をいくつも見つけて確信した。やはり、ここは前世で私が何度もプレイした乙女ゲームの世界なのだ。

『星鏡のレイラ』は魔法が存在する世界で、ゲームでもキャラクター達が魔法を使っていた。魔法を使う度に魔法陣が画面に大きく表示されるため、私はいくつかの魔法陣を見慣れてしまっていたのだ。そして、見慣れた魔法陣がいくつもあることが私の魔法の習得を早めた。

ゲームで見ていた魔法はもちろんのこと、ゲームでは使われなかった魔法も積極的に学び習得し

た。ゲームでよく見ていた魔法はヒロインの水属性の魔法で、傷を癒す治癒魔法、体力を回復させる回復魔法などがある。次にヒロインが最も攻略しやすいリヒトの光属性の魔法で、光の聖剣で相手を切り裂く魔法、呪いや毒などを無効化する浄化魔法などである。後は火属性、風属性、地属性、そしてカルロの闇属性の魔法。何度も繰り返しプレイしたためそれらの魔法陣も私は覚えていた。

「王子は本当に神童そのものですね」

気難しいと言われる魔塔主まとうめし——簡単に言えば魔法研究所の所長だ——までもそのように評したことに気をよくした両親は、私が何を学びたがっても止めることはなく、むしろ後押しをしてくれた。

私がかここまで熱心に魔法を勉強したのは、単純に魔法に興味深かったのもあるが、もう一つ大事な理由がある。

せっかくこの世界に生まれてきたのだから、私は推しキャラであるカルロに不幸が降りかかる前に守ってあげたかったのだ。

カルロの不幸は、両親を盗賊の襲撃事件で亡くすところから始まる。カルロの両親が領地への視察へ行く道中、盗賊に馬車を襲われて殺されてしまったとゲームでは語られていた。その後、まだ幼かったカルロの後見人としてカルロの叔父が屋敷と領地を管理するようになった。叔父が後見人となつてすぐにカルロは彼に襲われかけたが、執事長に庇われて難を逃れた。しかし、その執事長も叔父に辞めさせられてしまう。彼が残してゆく先代の子を案じ最後にできたのが、カルロを王都から離れた領地に逃すことだった。だが、カルロが六歳の時に王城で開かれたパーティーに参加し

た際、叔父に空き部屋に連れ込まれ、悲劇が起きる。そして、ヒロインと結ばれずにカルロがハッピーエンドを迎えられなかった場合、カルロは叔父に監禁されるのだ。

ゲームの内容を思い出すのも悍ましく、それがこの先の未来で本当に起こるのかと思うと吐き気さえ覚えた。私はこの未来を回避するために魔法を習得し、まずはカルロの両親を守るつもりだった。

ただ、守るにも問題がある。カルロの両親がいつ襲われるのかわからないのだ。ゲームではカルロの両親が殺されるのはカルロが幼い頃としか語られなかったので、数年単位で注意する必要があるだろう。しかも、私は王子という立場で簡単には出歩けない。自分で調査できないのなら、自分の手足となって動いてくれる者が必要だった。私は魔法の習得と共に、信頼できる部下——危険なことに巻き込まれる可能性があるため、騎士が望ましい——を探すことにした。

三歳になった頃、私は剣術が学びたいと両親に頼み、王宮近衛騎士団の訓練場に入りようになった。王宮近衛騎士団は現王を身近で守るための存在であり、王宮騎士団の中でも優れた剣技と高い忠誠心を持つエリートのみがなることができる存在だ。まだ存在を公表されていない私のことも、王や王妃の護衛をしている彼らは知っており、改めて口止めをする必要もないため、私の訓練に付き合ってもらっていた。

王宮近衛騎士団の訓練場に入りようになった私は、見慣れた顔があることに気がついた。ゲーム画面でいつもリヒトに付き従っていた騎士だ。名前も表示されないいわゆるモブキャラだっ

たが、吊り目でいつも無表情、かなりしつかりした体躯で赤い髪、左頬に傷、と特徴が一致している。

「リヒト王子、どうされましたか？」

王宮近衛騎士団の騎士団長に声をかけられて私は慌てた。前世のことを思い出していて、ついモブ騎士に見入ってしまった……なんて言えない。慌てる私をどう捉えたのか、騎士団長は微笑ましそうな顔で続ける。

「グレデン卿が気になりますか？」

「はい！ 大きくて格好いいです！」
私は子供らしい笑顔と言葉で誤魔化した。こういう時、子供というのはとても便利だ。とりあえず笑っておけばいいのだから。

さらに幸運なことに、名前まで知ることができた。彼はグレデンという家名のようなのだ。そこで私はあれ？ と、とあることに気づき、内心で首を傾げる。

騎士団長がグレデン卿を視線だけで呼ぶと、グレデン卿は体躯に似合わない静かな足音で私の目の前まで来て、片膝をついて頭を垂れた。

「この国を統べる耀く星にご挨拶申し上げます」

「顔を上げてください。グレデン卿の生家は公爵家ですか？」

凛々しい顔を上げたグレデン卿は私の問いに「はい」と短く答えた。私が気づいたことはこれだ。グレデン卿は公爵家の人間なのだ。公爵家ならば領地に専属の騎士団を抱えていて、家門の者はそ

ここに属すると思っていたが、彼は王宮近衛騎士団にいる……何か理由があるのだろうか？

「グレデン卿ならば家柄も申し分ないですし、腕も確かですから、リヒト王子の剣の先生になってもらうのもいいかもしれませんね」

騎士団長の言葉に私はすぐに賛同した。ゲームでリヒトに付き従っていたのだから、いずれは私専属の護衛騎士になるのだろうが、私はできるだけ早く信用できる者を傍におきたかった。ゲームでも王太子のリヒトの傍にいた彼ならば信用できる側近候補として充分だろう。

それから私はグレデン卿から剣術を教わるようになった。しかし、グレデン卿は定期的に外出し、グレデン卿の代わりに騎士団長や他の騎士が稽古をつけてくれる日も多かった。

「グレデン卿は今日も外出ですか？」

騎士団の仕事はやはり忙しいのだなど、それくらいの気持ちで聞いたのだが、騎士団長は困ったように眉尻を下げた。

「本来はグレデン卿本人からお話しすべきことなのですが……」

そう言葉を途中で切り、騎士団長は「今日は少しお話ししましょう」と、私と乳母を執務室に案内した。騎士団長の執務室があるのは訓練場の脇にある騎士団のための建物だ。騎士達のための食堂や休憩室、着替えを行える部屋、武器の保管庫などもある。その建物の中に騎士団長の執務室もあった。

騎士団長は度々グレデン卿が私の稽古を他の者に任せて外出していることを詫びた。そして、その理由を教えてくださいました。

「グレデン卿は五年前にいなくなりました。弟を捜しているのです。その捜索のために度々出かけられています」

「弟さんは当時いくつだったのですか？」

「六歳でした」

「六歳なら家出という可能性は低そうですね」

公爵家という宝くじにでも当たったかのような家に生まれて家出をしたいと思う者はあまりいないだろう。いるとしたら、虐待などの問題を抱えていた場合だろうか？ それでも、食事を与えられないなど本当にひどい状況でなければ家出はしないだろう。六歳の子供が一人で生きていくのは前世でも大変なことだが、この世界は前世以上に過酷だろうから。それに、グレデン卿のような誠実な兄が傍にいたのなら、たとえ両親に疎まれていても、目に見えてひどい虐待が行われる可能性は低いように思える。

「捜われたのでしょうか？ それとも、事故ですか？」

私の問いかけに騎士団長が驚いたように目を丸くして私を見てくる。

「なんですか？」

私が首を傾げると、騎士団長は数度瞬きをして聞いてきた。

「リヒト様は本当に三歳なのでしょうか？」

……こういう時、実は中身は成人男性なんですよ、と正直に答えられたらどんなにいいだろう。

「もうすぐ四歳になります」

子供らしい純粹無垢そうに見える笑顔を作ってそう答えると、「そういうことではないのです
が」と騎士団長は苦笑した。

「グレデン卿の弟が攫さらわれたのか、事故だったのか、はたまた自ら家を出たのか、そうしたことは
全くわかっていないようです」

わかっているということとは攫さらわれた痕跡や事故の痕跡は残っていないことだろう。とな
ると、自ら家を出たか、攫さらった者が内部犯だったか……

「まだ王子のお披露目ができないのが残念です」

唐突な騎士団長の言葉に私は顔を上げて彼を見上げた。

「四歳のお誕生日ではまだご家族のみでのお祝いですよね？」

どうやらまだ年齢の話が続いていたようだ。正直、今の私にとって誕生日は喜ばしいものではな
い。カルロが汚されたのは王子のお披露目の夜なのだ。それはつまり、私の七歳の誕生日というこ
とで、私が一つ歳を重ねる度にカルロの悲劇の日が近づくのだ。

「もつとゆつくりと月日が流れてくれればいいのに……」

思わず漏れてしまった私の言葉に、騎士団長はその目を見開いて再び私を凝視した。

「王子は時々、私よりも年上のようなことをおっしゃいますね」

私は再び純粹無垢そうに見えるはずの笑顔を作った。万が一にも私の中身を見透かされてはなら
ない。

「リヒト様のその聞き分けの良さに我らが甘えていた自覚は正直ございます。剣術の指南役という

お役目をいただければ、グレデン卿も仕事に集中して弟のことを忘れることができるかと思っただけ
ですが……もしもご不満があるようでしたら今からでも指南役を替えましょうか？」

私はその騎士団長の言葉に驚いた。グレデン卿が私の指南役になったところで弟のことを忘れる
わけがない。むしろ、なぜ騎士団長はもつとグレデン卿に協力してあげないのだろうか？ 騎士団
長として非情な男ではないのに、このグレデン卿の弟に関する感覚の齟齬は何だろうか？

「いいえ。私の我儘で、一般的な令息が剣を習う時期より前倒しで稽古をお願いしているのです。
私の剣術の稽古よりもグレデン卿の弟さんを探すことのほうが大切です。お節介にならないなら、
むしろ捜索に協力したいです。調査資料を見せていただくことはできますか？」

私としては早くその事件を解決して、グレデン卿に私の片腕として動いてもらいたい。

そう思っただけの発言だったが、騎士団長からは驚くべき答えが返ってきた。グレデン公爵からは
失踪した子息の捜索依頼がなく、公爵家の子息が失踪したにもかかわらず王宮騎士団では捜索を行
なっていないという。私はてっきり、失踪してから数年は捜索をしていたが、進展がないために現
在は積極的な捜索を行っていないのだと思っていた。そもそも捜索を行っていないなんて……

「公爵家の騎士団が独自に捜索を行っているということでしょうか？」

この国における公爵家の騎士団に与えられた権限を思えば、グレデン公爵領の中だけならばまだ
しも、王都や他の地域まで捜索の手を伸ばすためには王宮騎士団に依頼する他ないと思うが、何か
の事情により公爵家だけで動いているのだろうか？ しかし、騎士団長はそのような動きもなかっ
たと言う。

ここまで聞いて、グレデン卿が公爵家の騎士団には所属せずに王宮騎士団に入団した理由がわかった気がした。まだ確証はないが、グレデン卿の弟の失踪には父親である公爵、あるいは公爵に近しい者が関わっている可能性が高く、家の者が信用できないのだろう。

「騎士団長、申し訳ありませんが、今日の稽古は中止してもらえますか？ 私は父上に会わなければならなくなりました」

本当は今すぐに騎士団長にグレデン卿の弟が失踪した事件の調査を命じたかった。けれど、私は所詮ただの王子に過ぎないため、父親である王を飛び越えて騎士団に命令できる立場ではない。だから、私は父王に、一時的に騎士団の指揮権が欲しいとお願ひすることにしたのだ。きつと、まだ三歳の子供が何を言っているのかと却下されるだろう。それでも、なんとか説得して、グレデン卿の弟を探し出さなければいけない。そう覚悟を決めて、父王に会った。

——すると。

「ああ。リヒトの好きに使いなさい」

王宮近衛騎士団への指揮権が欲しいという私のおねだりへの父王の返事はあっさりしたものだった。こんなことでいいのだろうか？ 私はまだ三歳の子供だ。ここは、「騎士団はおもちゃではない」と一度は叱るべきところではないだろうか？

ゲームの中のリヒトが我儘放題の悪役王子でなかったのが不思議なくらいに王も王妃も息子に甘い。これでもいいのかと内心首を傾げながらも、「ありがとうございます」と父王に頭を下げてから執務室を出た。父王はお茶でも飲んでいったらどうかと私を引き留めたが、そんな暇はないので丁

重にお断りした。

次の日、私はいつもの訓練場ではなく、両親の執務室に挟まれている勉強部屋でグレデン卿に会った。少し居心地の悪そうな表情を見せたグレデン卿にソファー席を勧める。お茶を出してくれたいメイドを下がらせて、乳母だけを部屋に残すと、乳母は静かに私の後ろに立った。

「剣術の師匠をこんなところにお呼びしてすみません」

私が謝罪するとグレデン卿は慌てて「いえ」と答えてくれた。

「昨日、騎士団長からグレデン卿の弟さんのことを聞きました」

グレデン卿は驚いたようにその目を見開き、それから緊張した表情を見せた。

「決して、王子の剣の指南役というお役目を軽んじていたわけではありません」

「ああ、誤解しないでください。グレデン卿を怒るために呼んだわけでも、不満を言うために呼んだわけでもありません」

私は、父上から王宮近衛騎士団の指揮権をもらったこと、そして、グレデン卿の弟さんの失踪事件の調査を行おうと考えていることを伝えた。グレデン卿は最初こそ驚いていたが、しばらくすると深く頭を下げた。「よろしくお願ひします」と言った声は、少し震えているようだった。

「それで、リヒト王子の望みはなんでしょうか？」

顔を上げたグレデン卿は私を真っ直ぐに見つめた。

「リヒト王子はずっと私を観察されていましたよね？ 私が信頼できる人物なのかどうかを見極め

ていたのではないですか？ 私に何か命じたいことがあって」

「鋭いですね」

「これでも騎士ですから」

探るような眼差しを送っていたことに気づかれていたことはなんだかバツが悪かったが、私のお願いを聞いてくれる様子なのはとてもありがたかった。

「ある家族のことを見守り、動きがあった時には教えてほしいのです」

「それはなぜかお聞きしても？」

「ごめんなさい。事情が複雑で、理由までは話せないのです」

この先に起きる未来の出来事を知っているなんて言えるわけがない。

私の答えに、グレデン卿はしばし考えてから言った。

「それならば、私の弟の調査の一環としてはどうでしょうか？」

確かに、実際に起こっている事件の調査に必要な事柄として複数の貴族の動向を探るように命じ、その貴族の中にカルロの家も入れておけば、カルロの両親の動向を探るためにグレデン卿だけではなく王宮近衛騎士団の力も借りることができる。王宮近衛騎士団の力を借りられるのであれば、グレデン卿だけに頼るよりも、盗賊からカルロの両親を守ることがずっと容易たやすくなるだろう。

「なるほど。それは思いつきませんでした。さすがですね！」

「王子のほうがいいですよ。今の私の言葉だけでご理解されるとは……騎士団長も言っていました、本当に三歳なのか疑ってしまいます」

私も中身はとっくに成人済なんですって言ってしまえばどんなに良かったことか……。私はこほんっと咳払いを一つしてから、身を乗り出して少し声を擧げた。

「それでは、まずはこれまでグレデン卿が調べた内容について教えていただいてもよろしいでしょうか？ 騎士団長から話を聞いた時、グレデン卿は弟さんを屋敷から連れ出した人の見当がついているのではないかと思います」

グレデン卿は驚いたように息を呑み、私を凝視した。私は言葉を続ける。

「もっと言えば、グレデン卿は犯人を追及することは諦めているのではないですか？」

「その通りです……なぜ、お分かりになったのですか？」

私は、まずグレデン卿が実家である公爵家の騎士団ではなく王宮騎士団にいることに疑問を持つたことを告げ、次に騎士団長の話で、グレデン卿が父親である公爵やその周辺を疑っていることに気づいた経緯を話した。

「騎士団長との会話だけでそこまで気づかれるとは、本当に王子はすごいですね」

「しかし、そこで新たな疑問が生まれました。王宮騎士団にいるよりも、公爵家に残ったまま探りを入れたほうが弟さんの居場所を示すヒントが掴めたのではないのでしょうか？」

私の言葉にグレデン卿は気まずそうな表情を見せた。

「王子、お恥ずかしながら、私は相手の裏をかくようなやり取りが苦手です……」

「お父上を疑っているということがすぐにバレてしまったのですか？」

「いえ……」

グレデン卿は少し口ごもり、その視線を彷徨させた。

「直接、聞いてしまいました」

私は一瞬、絶句した。苦手というレベルではない。犯人に「犯人ですか？」なんて聞いて「はい、そうです」なんて答えてもらえるわけがない。それどころか、証拠となるようなものは全て隠されたり、処分されるだろう。

冷静になるために私は一度目を閉じ、額に手を当ててしばし考える。

「その時のお父上の反応はどうだったのですか？」

そこから少しでも情報を得られたのだろうか？

「お前には関係のないことだと言われました」

「……え？」

それは、グレデン卿の弟さんをどこかにやったのは自分だと言っているようなものではないか？ つまり、「犯人ですか？」と聞かれて「はい、そうです」と答えたようなものだ。

「実の子供であつても虐待や、どこかに売り渡すようなことは犯罪ですよね？ どうして、父親を捕まえなかったのですか？ 家族の情ですか？」

そう問いついた私にグレデン卿は少しだけ不思議そうな顔をして、それから「そうか……」と力のない声を漏らした。

「どれほど聡明でも、王子はやはりまだ三歳だったのですね」

そんな当たり前のことをグレデン卿は言つて、苦笑つた。

「若い王子にこの国の汚らわしい慣習をお伝えすることには躊躇いがありますが……」

首を傾げる私に、グレデン卿は告げる。

「この国では、下位の貴族が上位の貴族に交渉材料として子供を贈る悪しき習わしがあるのです。特に、弟は母親似の可愛らしい子でしたから」

思わぬ言葉に私は頭が真っ白になり、グレデン卿が何を言っているのかわからなかった……いや、理解することを脳が全力で拒否していた。

「力のない貴族は自分達よりも力を持つ貴族に子供を差し出して、後ろ盾を得たり、資金を得たりするのです。よほど困窮していなければ長男や長女がそのような立場になることはありませんが、三番目、四番目の子供となると一番上の子供に何かあつたための予備という意味も薄くなりますから、家のために犠牲になることは珍しい話ではありません」

私はあまりに悍ましく許容し難い話に血の気が引くのを感じた。

「王子、大丈夫ですか？ ……調査に協力していただくにあたり、避けては通れぬ話題でしたので、包み隠さず話しましたが……このようなお話をお聞かせして、申し訳ございません」

グレデン卿が私の顔を覗き込む。その眼差しは本心に心配してくれているのだとわかるものだった。「いえ」と首を横に振つた私は気持ちを少し落ち着けて、それから絶対に聞かなければいけないことを聞いた。

「グレデン卿……王城の中は、既に探したのですよね？」

グレデン卿の家は公爵家だ。息子を下の階級の貴族に渡しても意味はないだろう。そうなる

グレデン公爵家よりも力のある公爵家に渡すか、公爵家の上の階級……王家に渡すかということになる。

「はい……しかし、城の中にはいませんでした」

「隈無く探したのですか？」

グレデン卿はしっかりと深く頷いた。

「不敬を承知で申し上げますが、私は前王を一番疑っていました。ですから、警備のふりをして前王の寝所に探しに行つたこともあります。しかし、弟はいませんでした」

「そうですか……」

私は少しほっとして息を吐いた。私の身内の犯行でなくて良かった。しかし、その私の様子にグレデン卿は困つたような表情を見せた。

「後で知つたことなのですが、前王の好みは線の細い美少年でした。私の弟は可愛い顔をしていましたが、私と一緒に剣の稽古をしていましたから歳の割にはがっしりとした体格でした。ですので、連れてこれなかったのではなく……」

「……一度は城に連れてこられたが、前王が受け取らなかつただけ、という可能性があるのですね？」

「ええ。その場合、すぐに他の貴族に下げ渡されたのだと思います」

「公爵家のご息を下げ渡すなどということがあるのでしょうか？」

「お恥ずかしながら公爵家とは言つても我が家は名ばかりで、他の公爵家と比べると貧しく、派閥

に入る貴族も少なく、振るえるような権力は乏しいのです。ですから、資金を得るために他の上級貴族や裕福な中級貴族に売つた可能性もあります」

まさか、グレデン公爵家がそれほど困窮しているとは思わなかつた。

「しかし、体面を重んずる父ですから、おそらく一度は弟を王に献上し、その後下げ渡された貴族から何かしらの利益を得たものと思います」

「もし、弟さんが王家に献上されているのであれば、何か記録が残されているはずですから調べてみます」

「調査の際は私を護衛としてお連れください」

「護衛ですか？ 私はまだ公にされていない身ですから、護衛をつけることができないはずですよ。代わりになかなか腕の立つ乳母が側についてくれています」

だから問題はないと言えば、グレデン卿はまた苦笑つた。

「王子はご自身のことには警戒心が薄くなるようですよ」

「どういう意味ですか？」

「先程話した前王の好みの男児をお忘れですか？」

「覚えていますよ。線の細い美少年ですよね？ それがどうかしたのですか？」

「王子はまさに前王の理想なのですよ」

グレデン卿の言葉に私は困惑した。いくら前王の好みの容姿だとしても私は血縁者だ。悪しき慣習に疑問も持たずに、むしろその慣習を活用していた可能性が高い前王の血縁者というのも嫌だが。

「前王が現王に王位を譲ったのはまだ五十代の頃です。健康に問題がないことを考えると歴代の王達と比べても早すぎる王位継承です」

グレデン卿の話の流れに私は緊張した。

「なぜ、そんなに早く王位を譲ったのか……それは、現王を忙しくさせ、現王の子供に近寄れる隙を作るためだと噂されています。王妃は美しい方ですから、お子様の容姿に期待してのことだと」

何のために私に近づきたいのか……それを察した瞬間、背筋に寒気が走った。

「わ、私は前王の実の孫なのですよ？」

「前王は王太子の頃から自由奔放な方でした。現王は幸いにも体格がよく顔も凛々しくおられるので前王の興味を引かなかつたようですが、側室のお子様の中には……」

血の気が引き、胃の辺りがムカムカしてきた。このまま話を聞いていたら嫌悪感に吐いてしまうかもしれないと思った時、乳母から声がかかった。

「グレデン卿、そこまで言えば王子は察することができませんので、それ以上の説明は不要です」

乳母は、グレデン卿の言葉を遮りはしたが、否定もしなかつた。つまり、それは今の話が真実だと明言しているようなものだ。私はあまりの悍ま^悍さに言葉を失った。

「リヒト様、本日の面会は終了して、休息をとられてください」

続く乳母の言葉に、私は力なく頷いた。

それから私は、本当に子供を物のようにやり取りすることが許されているのか、子供を守る法律

がないのかを知るために、法律書を隅から隅まで読んだ。結果、エトワール王国の法律では、異性間の強制わいせつはきつく禁じているにもかかわらず、同性間のそうした行為を禁じる法律や子供を守る法律がないことがわかつた。異性間の場合、刑罰は軽いもので鞭打ち、重いもので極刑、極刑より多少軽い刑で男性にとつて大切な部分の除去だ。異性間に関してはそれほどまでに厳しく定めているにもかかわらず、同性や子供達に関する記述は一切なかつた。

「フリーリンは前王から私を守ってくれていたのですね？」

フリーリン、とは乳母の名前だ。法律の勉強をしている間も私の側に控えていた彼女に聞いた。男性の護衛ではなく、乳母が私の側に常にいた理由は、きつとこの法律のためだ。万が一、前王が私に手を出そうとした際には、乳母が代わりに手を出されたという態で悲鳴をあげれば、王族でも法律に抗うことはできない。

つまり、フリーリンは、自らが汚されたと汚名を被る覚悟で私の側にいてくれたのだ。

「それがわたくしの勤めですので」

「ありがとう」

私は心から乳母や両親に感謝した。

思えば、城はとても広いのに私と両親の寝室は隣り合わせで、私の勉強部屋は両親の執務室に挟まるように作られていた。つまり、それらの部屋は全て、私の生活スペースであるところの後宮にある。私の勉強部屋が後宮にあるのはわかるが、王と王妃という立場の両親の執務室までもが本宮ではなく後宮にあるのはおかしいと思っていたし、これが前例のない部屋の配置だとは聞かされて

いたのだが、私は両親が親バカなだけだと思っていた。それらは全て、前王が私に近づかないようにするための対策だったのだ。

そして、表向きは乳母には私の世話をすること以外の仕事は与えられず、乳母が私から離れることはなかった。過保護すぎでは？　と思っていたが、それは乳母が私の護衛もかねていたからだった。

そうした警戒のおかげで、私はこれまで一度も祖父に会ったことがなかった。普通ならば同じ敷地内に住んでいる祖父に生まれてから一度も会ったことがないというのは不思議に思う点だったのだろうが、私にとってはこの世界はゲームの世界であり、前世とは常識が違う異世界で、さらには王族なんて生まれたものだから、両親以外に世話をしてくれる人が乳母を筆頭に沢山いるし、七歳になるまでは他の貴族にはお披露目をしないということも両親が決めていて……要するに祖父に会っていないのも、この世界では、もしくはこの世界の王族にとっては、そういうものなのだろうと思っていたのだ。しかし、実際のところは祖父が変態だったからという理由だったようだ。両親が良識のある人達で本当に良かった。

衝撃的な事実を知った数日後、私は乳母と晴れて私の護衛騎士となった——お披露目前なので護衛騎士は取り立てられないはずなのだが、父王があつさり許可した——グレデン卿を連れて、様々な記録を保管している部屋へと向かった。記録室の管理をしている第一補佐官に鍵を開けてもらい、中に入る。王室には国内の貴族や商人からの献上品だけでなく、他国から送られてくる品々もある。

逆に、こちらから送る品々もあり、そうしたものを全て書き留めている記録は何冊にもなる。逆い、こちらから送る品々もあり、そうしたものを全て書き留めている記録は何冊にもなる。

「五年前の献上品と報奨の目録を見せてください」

第一補佐官にお願いすると、彼はすぐに柵から五年前の献上品の目録と報奨の目録を取り出した。まずは献上品の目録から目を通す。グレデン卿の弟、ゲーツ・グレデンの名前は確かに献上品目録の中にあつたが、下賜品目録の中に名前がなかつた。では、前王がゲーツを気に入って手元においたのかというところもそれと違ふ。献上品とはいえども何も返さないというのは滅多にない。特に子供のやり取りは見返りが欲しいからこそその献上品だ。その献上品に対しては金品なり、権利や権力なり、何らかの返礼があるものだ。もしも前王がゲーツを気に入って手元においたのなら、グレデン公爵へ何らかの返礼があつたはずなのだ。下賜の品目としてゲーツ・グレデンの名前がない場合には、返礼を送った相手としてグレデン公爵の名前があるはずなのだが、それすらもないというのはおかしい。

「これは一体、どういうことなのでしょう……」

私は記録室の中を見回した。この目録が何を意味するのか？　一度は城に来たゲーツ・グレデンのその先を知ることができる記録は何だろうか？　事件に関する記録だろうか？　城内で起こったことに関する記録だろうか？

「僭越ながら王子、前王は記録を残すことを厭いとわれる方でした。特に、自分の恥となる記録は……」
第一補佐官の助言に私はそうかと納得する。

「五年前の人事の記録をお願いします」

前王が記録を残さないように命じたのならば、これ以上記録を探しても無駄だろう。しかし、記録に残せなくとも、記憶には残っているはずだ。前王の側にいた者ならばゲーツ・グレデンに何があつたのかを知っているかもしれない。人事記録を確認して調査対象者を絞り込もうと思ったのだが、人事記録には意外な人の名前が書かれていた。

マルクス・レトリー。それは、騎士団長の名前だった。まさか、私にグレデン卿が抱える悩みを教えてくれた人物がこの問題に深く関わっているなど考えもしなかった。私が思わずグレデン卿に視線を向けると、彼もまた記録書を覗き込み、そして、やはり驚きに言葉を失った。

その後、私達は急いで騎士団長がいるであろう訓練場へと向かった。訓練場ではいつも通り騎士団長が騎士達の指導をしている。騎士団長は近づいてくる私達に気づくと騎士達にそのまま訓練を続けるように指示をして私のほうへと歩いてきた。

「王子、そのお顔は私に話があるようですね」

「はい。騎士団長の執務室をお借りできますか？」

私の申し出を騎士団長はすんなりと聞き入れてくれた。

執務室で乳母が淹れてくれた温かいお茶を飲み、一旦気持ちを落ち着かせる。

「率直にお聞きします。騎士団長は、ゲーツ・グレデンの件について、グレデン卿に話を聞く前から知っていたのではないのでしょうか？」

私は真つ直ぐに騎士団長の目を見つめた。

「もう少し具体的に言えば、前王の護衛騎士として、間近でゲーツ・グレデンに何があつたのかを見ていたのではないですか？」

騎士団長も目を逸らすことなく、じっと私を見つめ返した。

「それをお話することは、リヒト王子のご命令でしょうか？」

彼には話を拒む気配はない。むしろ、命令だと言ってくれるならいつでも話せる、という雰囲気だ。私はしつかりと頷く。

「承知しました。前王により箱口令かたぐちめいが敷かれた事柄ではございますが、現王より騎士団の指揮権を与えられたリヒト王子の命に従い、お話しさせていただきます」

私を見つめていた目をそっと閉じて、当時のことを思い出すように騎士団長はゆっくりと語り始めた。

曰く、前王は十歳未満の華奢で美しい少年を好んだ。自室だけでなく、時には執務室にも同伴させた。謁見の間への同伴は側近達が止めていたが、側近達の努力がなければおそらくどこにでも連れて歩いただろうと言われている。

前王の好みの年齢を過ぎた少年達は側近達が見出せばそのまま城で働くこともあつたが、大抵は他の貴族に下賜されたり、買い取られたりした。前王の元に来る子供達は親に言われて仕方なく家のために来ていた者が多かったが、その中でも遅く自分を売り込み、時には自身の実家よりも位の高い家に行き裕福な暮らしを手に入れた者達もいるのだという。

「私はできるだけそうした子供達に注目することで、この慣習は悪いことばかりではないと思ひ込

もうとじていました」

騎士団長自身、侯爵家の三男で家が違えば彼らと同じ立場だったかもしれないという。ただ、レトリ―侯爵家は経済的にも家格にも恵まれており、グレデン公爵家のように息子を売る必要のない家門だった。三男以下の息子も自分のところの騎士団に所属させ、領地の守りを固めていた。そんなレトリ―家の三男である騎士団長がなぜ前王の護衛をしていたのかというと、王室の騎士団強化のための徴兵の時期と重なったという不運によってだった。

「徴兵された貴族は三年経てばその任を終えるはずですが、騎士団長はなぜまだここに残っているのですか？」

私の質問に騎士団長は弱々しく微笑んだ。

「私も帰りたいと思っていました……ですが、前王の側で見てきた少年達の姿が、私を城に留めているのです」

それは罪悪感だろうか？ 黙って騎士団長の話に耳を傾ける。

「私は前王の護衛騎士の一人でした。守るべきは王その人とされていましたが、私が守りたかったのはまだ小さな子供達でした。けれど、結局のところ、私は彼らに何もしてあげられませんでした」

彼の言葉に想像する。王と呼ぶのも悍ましい怪物に売り飛ばされる子供。その恐ろしい怪物以外の大人達もいるのに、誰も自分達を守ってくれない……思い浮かべただけで、吐き気がする。

そんなところに、グレデン卿の弟も入れられたのだ……

「ゲーツ・グレデンについて、お聞きしてもよろしいですか？」

そう尋ねると、騎士団長は頷き、またゆっくりと話し始めた。

「ゲーツ・グレデンは、前王の好みとは全く違う少年でした」

好みではない少年を献上された場合、前王は一瞥しただけですぐに他の貴族に与えるようにと命じるのみだったそうだ。しかし、時に体格の良い活発な様子の少年を見ると、前王は悍ましい悪戯心を出したのだという。

ゲーツ・グレデンの時も前王は悪魔のような遊びを思いつき、護衛騎士に当時騎士達が飼い慣らしていた犬の一匹を連れてこさせ、交尾をさせるように命じたそうだ。最初、護衛騎士は何を言われたのかわからなかったが、犬のものを少年に挿れろと言われてゾツとしたと騎士団長は語った。

はつきりとは言わなかったが個人の感覚を述べたことから、おそらく犬を連れてこいと命じられたのが当時護衛騎士だった騎士団長だったのだろう。

そのような悍ましい状況に追い込まれながらも、ゲーツ・グレデンは犬を一瞥して笑ったそうだ。「ゲーツ・グレデンはその時、驚くべきことを前王に提案したのです」

私とグレデン卿は身構えて話の続きを待った。危機的な状況でゲーツ・グレデンは一体何を提案したのだろうか？

「馬がいい……と」

「……は？」

私は思わず王子らしからぬ間抜けな声で聞き返した。

屈強な体躯の犬を前にゲーツ・グレデンはまるで馬鹿にするように笑い、犬のものでは小さいから馬がいいと……そう言ったそうだ。

私は思わずグレデン卿へ視線を向けた。ショックを受けていると思ったグレデン卿だったが、何やら考えている様子だ。

「前王はその提案をいたく気に入り、ゲーツ・グレデンとともに馬小屋へと行きました。馬小屋の中では暗くてよく見えないでしょうと言われて馬を外に出し、そして……ゲーツ・グレデンは軽やかに馬に飛び乗るとそのまま王宮から逃げ出しました」

「……え？」

緊張感で息苦しくなっていた私の耳にあまりにも見事なオチが伝わって、私は拍子抜けしてしまつた。

「その時にゲーツ・グレデンを逃したとして私は護衛騎士をクビになり、一介の騎士団員となりました。そして、前王は一人の少年にまんまとしてやられたことを恥じて箝口令が敷かれたのです」

騎士団長の話は終わったものの、私はあまりのオチにしばし呆然としてしまった。もちろん、一人の少年が辱めを受けることを免れたのは良かったが、その逃げ方はあまりにも衝撃的だった。

そこでようやく、「そつえば」とグレデン卿が口を開いた。

「弟は本当に可愛くて心配だったため、万が一の時にはそのように偽って馬で逃げると話したことがあったような気がします」

私はグレデン卿の言葉に心底ほつとした。年端もいかぬ子供が自分から「犬では小さい！ 馬の

ほうがいい！」なんていうアイデアを思いついて提案したのかと思い、世も末だと思つたが、大人の入れ知恵だったのか……いや、自分の子供を物のようにやり取りしている時点で、この国の貴族はだいたい末期ではあるが。

「えつと……」と私は気持ちを切り替える。

「その後のゲーツ・グレデンの行方はわかっていないのですよね？」

「はい。グレデン卿が騎士団に入ってきて、弟のことを探しているという話を聞くまでは私は領地に戻つたものとはかり思っていました」

「ゲーツは賢い子ですから、自分を売った父上の元には戻らないでしょう。私のところに来てくれれば良かったのですが、当時の私はまだ自分の屋敷を持っていませんでしたから、他の者に見つからずに私に声をかけるのは難しかったと思います」

「グレデン卿の弟さんに何があったのかはわかりましたが、彼がどこに居るのかを知る手がかりはありませんでしたね。結局、振り出しに戻ってしまいました。すみません。グレデン卿」

私は振り出しに戻つたことをグレデン卿に謝つた。しかし、グレデン卿は首を横に振つた。

「そんなことはありません。ゲーツが辱めを受けずに自身の誇りを守れたことがわかりましたし、探す場所をもっと広げなければいけないこともわかりました。それに、王子のおかげで堂々と捜索することができるようになりました」

グレデン卿はこれまで児童性愛者の貴族達を中心に調べていたが、ゲーツ・グレデンが前王から逃げてどこかに一人隠れて生きているのだとしたら探す場所は貴族の屋敷や別荘などではない。

「搜索範囲を下町や田舎町にも広げましょう」

その場でしばし私とグレデン卿の相談が続いた。

話が落ち着いた頃、騎士団長は私の前に膝をつき、深く頭を垂れた。

「王子、私を騎士団長から解任してください」

「いえ」と私は即答した。生真面目な騎士団長がそう言い出すことなどわかりきっていたから返答は既に用意していた。

「あなたは善良で有能な人材です。そのような方を解任するなど国の損失です。当時の少年達への贖罪の気持ちがあるのなら、ゲーツ・グレデンの搜索を全力で行ってください」

私をじっと見つめる騎士団長の目に徐々に涙が溢れ出し、その顔を見られまいと伏せられた目から涙の雫が落ちた。

「……承知いたしました」

騎士団長が声を絞り出すようにそう言って、私はそんな彼の肩にそっと触れた。

これほど純真で正義感の強い人は多くないだろう。もしかすると、彼の心の平穩のためには騎士団長という地位から引かせて騎士団を辞めさせてあげたほうがいいのかもしれない。ここにいる限りは前王の時代の嫌な思い出がつきまとうだろうから。

しかし、清廉潔白であるべき騎士団長の座に今まさに相応しい心根の人がついているのなら、その人にその座を守ってもらうのが得策だ。逃がしてあげることができなくて申し訳ないと私は心の中で謝罪した。

ゲーツ・グレデンの搜索範囲を広げると同時に、私はいよいよカルロの両親を救うために動き出した。

これまで貴族間でやり取りされた子供達のことにも調べるように騎士団に命じた。当然、今現在進行形でそのような悪事を行いそうな貴族達も調べ、そして、将来的に子供のやり取りが行われることを防ぐためにそのような行動を起こしそうな貴族達を監視するという任務も付け加えた。

カルロの両親については盗賊からの襲撃など具体的なことを伝えることはできないが、怪しい動きがないか監視する必要がある貴族達のリストにルーヴ伯爵家を入れておくことでカルロの両親が盗賊に襲われそうになった時には助けに入ることができるようにしておいた。ルーヴ伯爵家には不名誉な疑いをかけてしまうことになるが、命は守らせてもらうので許してもらいたい。

「リヒト様、ルーヴ伯爵夫妻の今後ひと月の予定がわかりました」

騎士団長が私の勉強部屋に直接資料を持ってきてくれた。私がルーヴ伯爵家の動向をこの国の悍ましい慣習とは違う理由で気にしていることは、今のところグレデン卿と騎士団長しか知らないことだ。私はルーヴ伯爵夫妻の予定と外出先までの地図を確認して、盗賊達が隠れやすい森などの場所を通過する日程が入っている日を示した。

「では、この日とこの日は複数人の騎士で密かに尾行し、必要な時には護衛をお願いします」

地道な作業ではあったが、私はカルロの未来を守るためにいつ報われるかわからないこの地道な護衛を繰り返した。明確な理由は明かしていなかったが、騎士達は文句も言わずに私の命令に従っ

てくれた。それは、私が王子だからという理由だけではなく、騎士団長とグレデン卿の助言に従って、私が三歳にして既に光の聖剣の使い手であることを騎士団に明かしたからだ。

両親にさえ隠していた魔法だったが、子供の私の指示に王宮近衛騎士団の騎士達が快く従ってくれる方法はないかと騎士団長とグレデン卿に相談したところ、二人とも私が使える魔法を気にしたのだ。あまり目立ちたくはなかったが、私が使える魔法を明かすだけでカルロの未来が変わるのならと私は二人に光の聖剣を見せたのだ。しばし呆然とした二人だったが、我に返った彼らはすぐに興奮した様子で騎士達にも私が光の聖剣を使えることを明かそうと提案した。

この国の建国神話には神が一人の勇敢な少年に光の聖剣を与え、それが世界で最初の魔法であったという話がある。魔法を使える誰もが光の属性を持つわけではないし、光属性の適正があるからといって、その全員が光の聖剣を使えるわけではなく、光の聖剣が使える者は王族かその近親者に百年に一度現れるかどうかというところだった。私の前の使い手は四代前の王だ。その王が光の聖剣を使えるようになったのも二十代後半だったという。光の聖剣の使い手で一番若くしてその力を手にしたのは建国神話の少年で十二歳だと言われている。つまり、三歳で光の聖剣が使える私は異例中の異例の存在だった。

王宮近衛騎士団の騎士達には私が光の聖剣を使えることは伝えたものの、当然、信びよう性を疑っている騎士達もいる。それでも自分達の主が光の聖剣を使えるという期待のほうが大きいようで、彼らは非常に素直に命令に従ってくれている。私としては騎士達にも実際に使えるところを見せてもよかったのだが、騎士団長はそこまでする必要はないと言った。信じられない者は命令無

視でもして騎士団を辞めればといいと騎士達の前で言い放ったのだ。随分と横暴だと思ったが、貴重な力は気軽に披露するものではないそうだ。

そして、四歳を少し過ぎた春。

「え？ ルーヴ伯爵を城に呼んだのですか？」

父王の執務室に呼ばれて顔を出せば、ルーヴ伯爵を城に呼んだことを聞かされた。

「最近、騎士団を使ってルーヴ伯爵の周囲を探っているのだろう？ 周りくどいことをせずとも城に招いて探りを入れてはどうかと思ってるな」

ペドフィリアの貴族達の動向を中心に探っていたのだが、ルーヴ伯爵はペドフィリアではないにも関わらず私が繰り返し動向を気にしていることが父王に伝わったようだ。父王は実に純粋ないい笑顔をしている。本当に良かれと思ってルーヴ伯爵を呼んでくれたのだろう。私は頭痛を覚えて頭を押さえた。

「どうした？ 具合が悪いのか？」

「ゲドルト様のせいだと思いますわ」

王妃がするように王を嗜めた。ゲドルトとは父王の名前である。

「ごめんなさいね。わたくしが気づいた時には既に使者をルーヴ伯爵の屋敷に送った後だったのです」

私はできるだけ目立たないようにカルロの両親を助けたかったが、父王が悪いのかと言えばそう

とは言えないだろう。私は父王の騎士団を使って勝手にしているわけだし、息子に甘い父王は私の手助けをしようと思つてのことだろう。

「もしや、私はリヒトの足を引つ張つてしまったのだろうか？」

父王が何だか情けない顔をしている。王なのだからもう少し威厳を持ってもらいたいと思つたのだ、その表情からは人の良さが滲み出ている。

「いえ、私のことを思つて父上が行動してくださったことはわかつております。それで、ルーヴ伯爵はいつ城に来るのでしょうか？」

ルーヴ伯爵が来るまでにそれなりの用件を用意しておく必要がある。

「もう一刻もすれば登城するだろう」

頭痛が悪化した。

「リヒトはルーヴ伯爵に騎士団が監視していることは知られたくないのですよね？」

目眩を覚えながらも私が頷くと、王妃がにこりと微笑んだ。

「それでしたら、わたくしが上手く誤魔化しておきますわ」

私は王妃に心からの感謝を伝えた。その隣で王がしょんぼりとしていたが、それには気づかなかつたことにする。

「謁見の様子が気になりますか？」

勉強部屋で読書をしていた私に乳母がそう聞いた。いつもよりも集中力が欠けて、何度も顔を上

げてしまつていたからだろう。

「きつと、母上ならば上手く誤魔化してくださいとは思つたのですが」

「ええ。きつと王妃様ならば大丈夫ですわ」

王妃と親友である乳母はどこどなく誇らしげだ。

私は乳母が淹れてくれた紅茶に口をつけた。前世では飲むことのなかつた一級品の茶葉を使用し淹れられた紅茶だ。

ふと、視線を窓の外、奥庭へと向ける。私の勉強部屋から見える庭は王や王妃の執務室からも見え、高貴な者の目に入る場所のため、他の貴族は立ち入り禁止の区域だ。自由に出入りできるのは王家の者以外には庭師くらいのものである。そのため、この庭を見ることが非常に名誉なことだと考える貴族もあり、老齢の貴族などは褒美として夫婦で庭を鑑賞したいなどと言う者もいる。

その奥庭に私と同じ年頃の少年の姿を見つけて、私は息を呑んだ。

「奥庭に迷い込んだのでしょうか？」

私の視線を追つて窓の外を見た乳母が言った。

「まだ幼いですから、見回りの騎士に言うまでもないでしょう。メイドに行かせます」

幼子の姿に目を奪われていた私は思わず乳母の手を握り、その動きを止めた。

「リヒト様？」

「見知らぬところで怯えているかもしれません。私が行きます」

私の言葉に少し驚いた様子だった乳母はすぐに優しく微笑み、「お供します」と返してくれた。

私は急ぎ足にならないように気をつけつつ乳母とともに庭へと向かった。

「確かに、リヒト様にも同じ年頃のお友達が必要ですね」

「私は七歳まで公表されないのでですから無理ですよね？」

「わたくしに子供がいたらよかったですけれどね」

同じ頃に子供が生まれた夫人を乳母として私を育てるという案もあったが、王妃である母上は幸いとても健康で、母乳の出が悪いとか母乳が出なくなるなどというトラブルもなく私を育ててくれた。そのため、王妃の代わりに母乳を飲ませる乳母は必要なく、王妃の補助として子育てを行ってくれる女性を乳母とすることにしたそうだ。そうして選ばれたのが、王妃が最も信頼している親友だったというわけだ。

「宰相や第一補佐官も未婚でお子様はおられません、信頼できる貴族の子供を従者としてつけるのはいいかもしれません」

窓から見えた少年が、私の推測通りの少年ならばそういうわけにはいかないだろう。せっかく両親を助けようとしているのだから、今後も家族のもとでのびのびと幸せに育ってほしい。

庭園に出ると、窓から見えた少年は先程の場所から動かずにただただ庭を見つめているようだった。

「わたくしが近づいては驚かせてしまうかもしれません。わたくしはここで見ておりますから声をかけて差し上げてください」

いつも私の背後にピツタリくっついて乳母が珍しくそう言った。大人の介入なしに私と少年が知り合う機会を作ってくれようとしているのだろう。

これまで幾人もの大人達と対等に話してきた私だったが、少年に近づくのはとても緊張した。それは中身が子供慣れしていないからというのもあるが、最大の理由は……相手が前世からずっと応援してきた推しだからだ。

私が近づく気配に気づいて、少年は振り返った。柔らかな金糸のような髪が揺れ、太陽の陽を受けてキラキラと輝いていた。肌は透けるように白く、大きなアメジストの瞳も宝石のように煌いている。

私も金色の髪ではあるが、色味の強い金色である上、髪は癖が強く巻いてしまっている。王妃や乳母、メイド達は美しい髪だと褒めてくれるが、私は目の前の少年の柔らかな色合いでサラサラな髪のほうが綺麗だと思っし、好きだった。

少年の姿はゲームで見た十四歳の姿よりもずっとずっと幼いけれど、この美しい少年がカル口なのは間違いなかった。

どう声をかけようかと考えていると、カル口の唇が動いた。

「天の御使い様ですか？」

「……え？」

私が？ 天使のように愛らしいのはカル口のほうだと思うのだが？

「あ、ごめんなさい」

「どうやら違うと気づいたようだ。」

「妖精さんでしたか？」
ん？

「精霊さんですか？」

「いや、ちが……」

「妖精王ですか？ 大精霊？」

「いや、違うから……」

私の否定の言葉を聞いたカルロはハッとその瞳を見開いた。

「もしかして、神様ですか!？」

「違うよ！ 私は君と同じただの子供だから!!」

カルロはその瞳を見開いたまままばちばちと瞬きをした。その可愛さといったら、本当に天使のようだ。しかし、その瞳が不意に寂しげに伏せられた。

「あ……ごめんなさい。僕になんか正体を明かしてくださいさるわけないですよね……」

なんてネガティブなんだ!! ゲームでもとてもネガティブなキャラだったけれど、それは子供の頃のひどい経験のせいだと思っていた。しかし、まだカルロの両親は健在であり、叔父からもひどい目には遭わされていないはずだ。もしや、もともとネガティブな性格だったのだろうか？

「そうではなくて、本当に私はただの子供なんだ」

「はい……」

カルロはしょんぼりと俯いた。どうやら、まだ信じてくれないようだ。

「ご両親は？」

「父上は王様に謁見中です」

一人で王宮前の庭を歩いていて、ここに迷い込んでしまったというところか。

「ここは本来、王族しか自由に出入りできない庭なんだ。他の者に見つかるど面倒だから、王宮前の庭に送ってあげるよ」

「王族の庭……だから、こんなに美しいんですね」

「……気に入った？」

「はい！ とても綺麗です」

庭は確かに美しい。けれど、それ以上にずっとずっと綺麗なのはカルロだけだね。笑った顔が日の光に照らされてあまりにも美しく、私は素直にそう思った。

「それなら、もう少し見ていく？」

「でも、僕がここにいたら怒られるんじゃない……」

「本当は前以て許可が必要だけど、私が一緒なら大目に見てもらえるだろうから」

「僕と一緒にいてくださるんですか？」

私の言葉に、アメジストの瞳が嬉しそうに煌めいた。

「私は君が困らないように迎えにきたんだ。だから、この庭園にいる限りは一緒にいるよ」

まだ公表されていない存在の私はカルロと一緒に王宮の正面まで行くことはできないから、せめ

てこの場だけは一緒にいよう。

「ありがとうございます」

カルロははにかむように笑った。

……すごい、と素直に思う。

これまで、私は実際のカルロを見たら、ゲームとの比較で多少なりとも気持ちが変わると思っていた。画面の向こう側ではないカルロに対して、実在しているのだと冷静になったり、勝手に妄想で膨れ上がった底護欲が現実を前に落ち着いたり、といったように。しかし、カルロと実際に出会ったら、思った以上に可愛かった。そして、その可愛いという気持ちは、この短時間で何度も更新していく。こんなに可愛く思うのは、カルロがまだ小さな子供だからだろうか？ 底護欲をそめる顔立ちというか眼差しだからだろうか？ とにかく可愛い。可愛すぎて心が一杯一杯になる。こんな可愛い子を変態の毒牙に晒すわけにはいかない。

絶対に守ってあげなくては!!

私はカルロとしばらく庭で過ごした。自分の素性は明かさなかったし、カルロに名前を聞いたりもしなかった。

第一補佐官の使いの者がルーヴ伯爵の謁見が終わったことを乳母に伝えるに来て、私は乳母の視線でカルロに声をかけて王宮前の庭の手前まで送った。

「もう迷い込んだじゃだめだよ」

そう伝えるとカルロは少し寂しそうな表情を見せた。

「また、会ってくださいますか？」

きっと私のお披露目の時にはカルロも来てくれるだろう。そうしたら、また会えるよね？ そう考えて「もちろん」と、私はカルロの頭を撫でた。カルロがあまりに可愛くて、うっかり撫でてしまった。幼児が幼児の頭を撫でるのはおかしいだろう……しかし、撫でてしまったものは仕方ない。嫌がられていないかと恐る恐るカルロを見ると、カルロは嬉しそうにはにかんでいた。その姿がまた可愛くて、私はしばしカルロの頭を撫でてからカルロを解放した。

「フリーリン……」

カルロと別れて王宮内に戻った私は乳母に言った。

「私は親心を知ってしまいました」

「……リヒト様、僭越ながら、それは友情ではないでしょうか？」

いや、この感情は友情ではない。リヒトの中身の前世がその心を震わせて訴えてくるのだ。あのか弱い子供を守り通さなければならぬ！ この感情はまさしく父性だろう！

その後、ルーヴ伯爵夫妻が襲われたという報告は半年以上届かなかった。具体的にいつ襲われたのかはゲームでも語られていなかった。この件に関しては根気強く予防策を続けるしかなかった。もし、盗賊達が監視の目に気づいて襲ってこなかったとしても、カルロが穏やかに育つのならそれはそれで問題ない。とにかく、私のお披露目の日までカルロには平穏に過ごしてほしかった。

ゲーツ・グレデンに関しても全く進展のないまま月日は過ぎていった。こちらに関しては下町での調査において全く何の情報も得ることができず、おかしいと思った。調査をしているのは素人ではない。王宮騎士団のエリート達だ。最悪の場合、既に亡くなっている可能性も考えられたが、それでも何かしら情報はあるべきだろう。ここまで情報が出てこないと、むしろ誰かの意図を感じる。わざと情報を隠しているような気がするのだ。そして、情報を隠せるのは情報を扱う本職の者達だと私は考えた。

「下町に行きましょう」

騎士団長の執務室にて調査報告を受けていた私は思案の上でそう言った。私の言葉に騎士団長もグレデン卿も驚いたようだったが、一番驚いているのは乳母だった。

「リヒト様、危険な行動はお控えください」

その目には心配の色があった。

「リヒト様、我々に命じてくだされば良いのです。ご自身で下町に行くのはあまりにも危険です」騎士団長もそう言うてくれたが、私は考えを変えるつもりはない。

「私に行く必要があるところだから行くと言っているのです」

私はグレデン卿に下町の者に扮することができ服装を調達するようにお願いした。すると、乳母がすぐに口を挟んだ。

「それならばわたくしがメイド達から調達いたします」

「いいのですか？ フリューリン？」

説得するつもりではいたが、こうも簡単に許してくれるとは思わなかった。

「リヒト様はこうと決めたことは決して譲りませんし、わたくしが言いそうなことは大抵わかっていらつしやるかと思えます。ですので忠告はいたしますが、説得や議論をする時間は無駄です」

頑固者だと思われることは心外だが、私はこうした割り切った乳母の性格がとても好きだ。

「フリューリンは話が早くて助かります」

「わたくしがうるさく言えばそのうちリヒト様はわたくしの目を掻い潜ろうとするでしょう。そのようなことをされるよりはお近くでお守りできる場所にいたほうがマシですから」

乳母の言葉に私は嫌な予感を覚えた。

「フリューリン……まさか、ついてくるつもりじゃないですよね？」

「ついて行くつもりです」

「下町は危ないのでフリューリンは城で待っていてください！」

私の言葉に乳母と騎士団長が私をジッと見つめてくる。その目がどことなく冷たいのは気のせいではないだろう。王子という立場の自分自身が下町に行くこととしているのだ。それも、乳母が止めるのを振り切って。そんな私の止める言葉など、乳母が聞いてくれるはずがない。

「……わかりました。しっかりと変装していきましょう」

グレデン卿も一緒に行くし、いざとなったら乳母のことは転移魔法で逃がそう。私が一人そう考えていると、まるで私の心を読んだように乳母が言った。

「いざとなったらわたくしだけを逃がそうなどと考えるのはおやめください。王子がわたくしから

離れたら自害いたしますよ?」

おかしい。私が転移魔法を使えることは魔塔主以外には言っていないはずだ。それにもかかわらず、乳母は私の能力を見通しているようだった。

「フリーリン、私の心を読むのも、そのように怖いことを言うのもやめてください」
王族を脅すとは乳母の肝は据わり過ぎていないだろうか? 王妃の親友とはそういうものなのだろうか?

さておき、翌日にはメイドが私と乳母、そしてグレン卿のお忍び用の衣装を持ってきてくれた。私が想像していたのは下町を駆け回る子供の身軽な服装だったのだが、用意されたのは豪商の息子が着るような衣装だった。前世の世界なら、結婚式などにお呼ばれた男児が着るようなちよっとおしゃれな装いだ。普段着ている王子の衣装からすれば庶民的と言えなくもないが、下町で目立たずに溶け込めるのかどうかはちよっと怪しい。

「予想できていたことではありませんが、布地の質もデザインも全くリヒト様に相応しくございません」

乳母が不満を口にしながら私の着替えを手伝う。

「私としてはもっと簡易なもので良かったのですが……極端に言えば、農夫のような服装のほうが目立たないと思うのですが」

「農夫ですか? それでは、もしも地方に内密で行かなければならない時には庭師に衣装の相談をしましょう」

王室の庭師は見苦しくないようにいつも最高級のシャツとズボンを身につけている。執事との違いはジャケットを羽織っていないこと、動きやすい生地で作られていること、腕をまくっていても許されることくらいではないだろうか?

乳母の実家は侯爵家だ。母上に仕える侍女達も貴族出身。メイド達は貴族ではないにしろ、行儀見習いとして来ている商家の者が多い。私が考えていたような服装が手に入らないのも仕方ないことだった。諦めて今日はこの格好で下町まで行ってみて、あまりにも目立つようであれば服装のランクをさらに落としてもらうこととしよう。

私の支度を終えた乳母は着替えのために自身の部屋へ下がり、すぐに着替えてきてくれた。しかし、その首元や指にはいつもよりもだいぶ控えめながらも美しい宝石が光っていたため、それらを全て外してもらった。乳母は贅沢を好むタイプの人間ではなかったが、アクセサリーをつけることが身だしなみの一つとされている貴族社会の女性のため、まるで下着姿にでもなったように恥ずかしがっていた。そのような姿を見ると、美しさを少しでも隠すために化粧も落としてほしいとは言えなかった。

実際に城の外、王都へと出てみれば商家の子供の服装でもそれほど目立つことはなかった。とは言っても、ここはまだ王都の中心地で栄えているところだ。それに、大袈裟なジャケットを着ることを拒み、グレン卿にもジャケットは小脇に抱えてもらうようにしたのがよかったのだろう。ちなみに、お忍びなので護衛だとすぐわかるような長剣を持つてもらわねはいかず、小脇に抱え